

日本キリスト教会大阪北教会

2016年9月25日 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

ヨハネによる福音書13章21～30節

13:21 イエスはこう話し終わると、心を騒がせ、断言された。「はっきりしておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている。」 13:22 弟子たちは、だれについて言っておられるのか察しかねて、顔を見合わせた。 13:23 イエスのすぐ隣には、弟子たちの一人で、イエスの愛しておられた者が食事の席に着いていた。 13:24 シモン・ペトロはこの弟子に、だれについて言っておられるのかと尋ねるように合図した。 13:25 その弟子が、イエスの胸もとに寄りかかったまま、「主よ、それはだれのことですか」と言うと、 13:26 イエスは、「わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ」と答えられた。それから、パン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダにお与えになった。 13:27 ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った。そこでイエスは、「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」と彼に言われた。 13:28 座に着いていた者はだれも、なぜユダにこう言われたのか分からなかった。 13:29 ある者は、ユダが金入れを預かっていたので、「祭りに必要な物を買いなさい」とか、貧しい人に何か施すようにと、イエスが言われたのだと思っていた。 13:30 ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった。

《説教》『キリスト、弟子ユダに裏切られる』

◆今日は小学校と中学校が秋の運動会なので、日曜学校の生徒みんな来られないと思っておりましたが、まだ小学校に行っていない子どもたち4人が来ました。今、司会者の祈りにもありましたが、大きな教会でも日曜学校が休校状態になっている所が少なくありません。4人も来れば大喜びというような事で、子供は教会にとって宝であります。

◆先週の木曜日、かねて準備しておりました日本キリスト教会近畿中会合唱団が結成されました。70人以上入団希望者で、結成集会に集まった者が60人位でした。この会堂で、「ハレルヤ・コーラス」を頭から終わりまで歌いました。初めてと言う人も含め、家島正子姉の指揮で「ハレルヤ・コーラス」を歌ったのです。それで「指導教職として、一言どうぞ」という事でしたので、一言申しました。「今日集まられた皆さんは、私の葬儀の時は是非ご出席ください。そしてメサイヤの44番と45番をぜひ歌ってください。そして人の死はいつ来るか分かりませんから、悠長な練習をしていたら、私の葬儀に間に合いませんから、一生懸命練習してください」と。メサイヤ44番はハレルヤ・コーラスです。45番は凄く良いソプラノのソロ曲です。これは岩田さんに歌って頂きたいです。

◆ところで今日の聖書であります。どのような事柄であれ、人は自分自身で経験しないと、その事柄を理解できません。例えば、体のしんどさでもそうです。私などは根が丈夫ですから、しんどければ、さっと寝ますからすぐに回復します。けれども孝子さんはそうはいかない。ですからしんどさに対する同情が薄く、共感できないしております。

◆ですから何事についても経験しないとわからない。ところが経験しているのに理解できないこともあります。それが今日の箇所におけるイスカリオテのユダの場合だと思

ます。彼はイエス様の直弟子、十二人の内の一人ですね。イエス様と本当に起居を共にしている者でありました。弟子というのは先生に習う者であります。そういうことですが、結局のところ先生がいかなる御方であるかということは、結局理解できなかつた。そのことが今日の聖書の箇所ではっきりするわけであります。

◆昔よく言った森有正という思想家、哲学者がおりました。明治時代の最初の文部大臣森有礼の孫です。彼は「人間の人生にとって大切なことは経験の深まりです」と言いました。森有正は「体験」と「経験」を区別しています。つまり体験しているが経験になっていない。経験の深まりは理解の深まり、認識の深まりです。同じことを体験していても、真の理解、認識が伴わないのは経験とは言えない。例えば聖書です。聖書の理解には終わりがありません。同じ箇所でも、何度も理解の改まり、認識の深まりが起こります。そういう点では私たちは経験、理解の深まりを願わざるを得ないのであります。

◆ユダヤ人にとって信仰の原点は何かと言えば、人間的にはアブラハムの信仰と言ってよいと思います。アブラハムの信仰を一言で言えば「ヤハウェ・イルエ」に尽きます。「主は備え給う。」「備える」とは「先を見る」という言葉です。私たちは先を見たつもりでも近くしか見ていません。神様は先の先を御覧になって、この人には今この事が必要だとして、適切に為さって下さる。これが「備える」という事です。そして民族的、歴史的には出エジプトの経験です。エジプト帝国の奴隷状態から解放された出来事、これが旧約聖書の根源にある歴史的な出来事で、これを外して旧約聖書は理解できません。そしてこれについては、先週、「イエス様は、事が起こった時、『わたしはある』ということをおあなたがたが信じるようになるためである」という事に触れました。「わたしはある。」これが神様の自称なのだとは何度も申しました。「わたしはある。わたしはあると言う者だ」と神様はモーセに言われました。「私が共にいるのだから、エジプトを恐れるな」と励まされ、モーセはエジプトの王パロに立ち向かいます。そしてエジプト脱出を遂げます。ところがエジプトの軍隊が追いかけて来る。前に紅海がある。正に絶体絶命のピンチです。しかし神様は介入され、海中に道を開き、イスラエルの民を救われました。

◆それでキリストも弟子たちも、イエス様と起居を共にする中で、あの「山上の変貌」を経験いたします。ある時突然、イエス様の姿が変わるわけです。何とモーセとエリヤとイエス様が三人で話しておられる。そういう場面に遭遇します。そこで弟子たちのイエス様に対する畏れと信頼が深まります。私達の先生はそこいらの律法学者程度の御方ではない。モーセやエリヤ並みの預言者、指導者であられるのだ。一切を捨ててこの方に従ったことは間違いではなかつたとの確信を強められる出来事を体験いたします。

◆しかし、「わたしはある」と言われた神様と同等の御方、神様と一体の御方であるということは、信じ難いことであります。そしてこれは無理からぬことだと思えます。その点で、イエス様が本当にそういう御方であるということについて、一番親密な理解を持っていたのは誰かと言えば、イエス様のお母様・マリヤさんだと言ってよいでしょう。

「処女降誕」については、その始めから疑われて来ました。今日もそうです。けれどもイエス様が神様とご一体の方であるならば、それにふさわしいこの世への到来の形があると思えます。けれども一般の人は、イエスの父親は誰だか分からない。ローマの兵士だろうとか、ありとあらゆる推測がなされてきました。その点ではマリヤさんだけが、

真相を知っておられるのです。そう言ってよいのではないのでしょうか。

◆そして今日の聖書から分かることは、この御方は、神様は、裏切りをも赦す御方。裏切りが分かっている、それを許す、そういう御方なのだということが、今日の聖書から分かります。「ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った。そこでイエスは、『しようとしていることを、今すぐしなさい』と彼に言われた。座に着いている者はだれも、なぜユダにこう言われたのかわからなかった。ある者は、ユダが金入れを預かっていたので、『祭りに必要な物を買いなさい』とか、『貧しい人に何か施すように』と、イエスが言われたのだと思っていた。ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった。」サタンというのは「敵対者」という意味のことばですね。そのことが分かった上で、「しようとしていることを、今すぐしなさい」とのイエス様の御言葉ですと、裏切りをそそのかしておられるようにさえ聞こえます。古いクリスチャンの方は、「絶対の恩寵」という言葉が心に刻まれていると思います。神様が為さって下さる事は、「絶対の恩寵」なのです。或いは「絶対の赦罪（罪の赦し）」と言い換えてもよいでしょう。

◆この前の炊き出しの時、天谷直子姉も参加されました。中之島現地の炊き出しから戻って奉仕者全員で昼食を頂きます。食前のお祈りはいつも丹波恵先生にして頂きます。祈りが終わると、天谷さんは少し涙もろいところがあるのですが、「私は丹波先生のお祈りを聞くといつも泣けてくるのです」と言われました。これには私も全く同感なのです。なぜなら、丹波先生のお祈りに「絶対の恩寵」という言葉があるわけではありませんが、「罪深い者が罪赦されて、今ここにある事を心から感謝致します。」そう祈られない事は一度もありません。「恵みに相応しく者を神様は赦し、受け入れて下さり、今ここにあるを許されています事を感謝いたします。」その度に私は襟を正し、身を小さく致します。

◆それにしましても、リオのオリンピック、パラリンピックは迫力がありません。ひきつけられましたね。あるパラリンピックの選手がこう言いました。「自分にとって障害は克服するためにあるものです」と。しかしこのように言えるまでにその選手がどれだけの長い闇の時を過ごしたかしのれないなあと思いました、星野富弘さんをよく例に出しますが、彼も中学の先生になった年の夏に頸髄損傷で下半身麻痺になり、9年間も入院生活をされました。その間の口癖は“チクショー”でした。しかし、その間に彼は聖書に出会い、キリスト者になります。9年後退院してその翌年、35歳の時に結婚されます。今は何ともいえない絵と言葉を書く人になっておられます。少し逆説的ですが、ユダの裏切りも、それは克服されるための通過点だと言えるのではないのでしょうか。ユダの裏切りがなかったら、主イエス・キリストの本当の姿を彼は知らないままに終わってしまったらと思うのです。

◆わたしは今回、この箇所を読んで色々思い巡らし、「あっ！そうか。イスカリオテのユダという人は、最初のクリスチャンだ」と思うに至りました。私たちはパウロの回心のことをよく言います。けれどもそれはもっと後の話ですね。キリスト教会が生まれ、伝道が進んだ中でパウロは教会を迫害した。その上でパウロの回心は起こります。しかしユダの回心はイエス様の十字架の死の前に起こっているのです。イエス様の死の前に、ユダの回心は起こっているのです。「イスカリオテ」とは、「シカリ党」という名の過激派集団の名で、「熱心党」以上に過激なグループでした。マタイによる福音書27節3節

から5節にこうあります。「そのころイエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちや長老たちに返そうとして、『わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました。』と言った。しかし彼らは、「我々の知ったことではない。お前の問題だ」と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ」と。イエス様が十字架にかけられる前に、ユダは後悔して自殺したのです。ですからユダの回心は文字通り命がけの回心ですね。

◆ジョアンナ姉がこの前のスピーチの最後のところで、「私は、アレキサンダー宣教師の最後の回心者です。私の信仰の歩みは今始まったばかりです」と言われました。本当にジョアンナ姉は教会離れをしておられました。政治の世界に生きられていた方ですね。ところがアレキサンダー宣教師が建てられた日本の教会に出会い、教会に立ち戻られたのです。イスカリオテのユダは最初のキリスト教回心者です。今日の箇所30節にこうあります。「ユダはパン切れを受け取るとすぐ出て行った。夜であった」と。銀貨三十枚は奴隷一人の価格と言います。イエス様はゲッセマネの園で祈られます。そこでもイエス様は言われます「友よ、しようとするをすることをしよう」と、言われました。今日の箇所でも「しようとしていることを、今すぐ、しなさい」と。ユダは出て行きます。そして兵士をつれてゲッセマネの園に来ます。その時イエス様は「友よ、しようとするををいますぐしなさい」と言われます。これを聞いた時にユダは「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」と言います。今まで一緒にいても、ユダはイエス様がここまでの御方とは思わなかった。気がつかなかった。このイエス様のお言葉によって、ユダは目が覚めます。「絶対の恩寵」をイエス様に見ます。「絶対の赦罪」を経験します。

◆主イエス・キリストの存在と、御業は、奇跡というほかありません。神様の人間に対する限りない奉仕と言えはよいでしょうか。旧約聖書のどの預言者とも違うイエス様に触れて、ユダはあ、なんという思い違いをしていたかと気付いたのです。さきほどパラリンピックの選手の「わたしにとって障害は克服するためにあります」という言葉を紹介しました。勿論、突然の自動車事故とかは、本当に痛ましいことですね。ですから、障害も、つまずきも、裏切りも、なければ人生はもっと安穩に暮らせる。その通りだと思えますね。大阪はこの前の日曜も、今日も、炊き出しの日も、全部晴れでしたですね。それは誠に感謝ですけれども、被害に遭われた人は全国に一杯おられますから、事柄は単純ではありません。そしてイスカリオテのユダの裏切りも、人生では起こるのです。しかし、それも本当に何があっても崩れない「恩寵」と言えはよいのか、「赦罪」と言えはよいのか、その事に目覚める通過点。主は備えて下さる。主は私達と共にいて下さる。「わたしがいる。」障害も、裏切りも、これは通過点なのだ。どうしても通り抜けられないいけない通過点なのだ。これが聖書のメッセージではないでしょうか。どのような試練の中にも共にいて下さる主を信じ、経験の深まり求め、歩んで行きたく思います。

◆お祈りいたします

愛と赦しに富み給う主イエス・キリストの父なる神様

誠に、あなたの御赦しなしにはひと時もありませんけれども、あなたの御恩寵のゆえに、今このように歩みえている幸いを心から感謝いたします。どうかあなたの恵みをほめたたえつつ、日々歩ませてください。

この祈り、イエス様の御名を通し、御前におささげいたします。アーメン。